

■学校経営のポイント

子どもたちが幸せを感じられる学校に

喜名 朝博

国連が公表した世界幸福度ランキング。日本は、143か国中51位、G7では最下位だった。国民性の違いなどあって単純に比較はできないものの、その順位には納得できるところもある。

では、子どもたちはどうか。東大とベネッセは、経年で実施している「子どもの生活と学びに関する親子調査」を「子どもの幸せ実感」として分析し、結果を公表した(左QRコード参照)。



自校の子どもたちの幸福を考える端緒に

「自分は今、幸せだ」に対し「とてもそう思う・まあそう思う」と答えた小4～小6は90.5%、中学生は83%、高校生は81.7%だった。2017年と比べると「とてもそう思う」の割合は全体で6.1ポイント減少している。ただ、この数字をもって子どもたちの幸福度が下がったとは言えない。そもそも、幸せ実感はきわめて主観的なものだ。この調査の価値は、様々なデータを「子どもたちの幸せ」という視点で分析しているところにある。

昨年4月にこども家庭庁が新設、同時にこども基本法が施行された。今期の教育振興基本計画も日本社会に根差したウェルビーイングの向上を掲げるなど、子どもたちの幸福を目指すという社会の流れがある。本調査を参考に、自校の子どもたちが幸せを感じるのはどんな時か、幸せ実感の要素は何かを明らかにし、学校改善や授業改善の端緒としていきたい。

ウェルビーイングは個々の問題である

ウェルビーイングな状態とは、子どもたち一人ひとりがそれぞれに幸せや生きがいを感じることである。しかし、子どもたちの幸せ感度やその基準は多様である。だからこそ、自校の子どもたちの実態を把握しておく必要があるのだ。さらに、子どもたちを取り巻く環境が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあるこ

とも求められている。学校や学級に同調圧力はないか、心理的安全性は保たれているか、自己実現は図られているか、ニーズに応えられているかなど、子どもたちの視点で学校の状況を見直し、改善していくことが必要になってくる。

個別最適な学びと獲得的ウェルビーイングの向上

自己肯定感や自己実現など、個人に関わる獲得的ウェルビーイングには、指導の個別化や学習の個性化が欠かせない。全ての子どもたちが「分かった」「できた」と実感できるよう個別最適な学びを充実させていく必要がある。しかし、大切なのはゴールだけではない。先の調査では、「勉強しようという気持ちがわからない」といった学習意欲の減退が12ポイントも増加している。学ぶ意欲がわからない子どもたちの興味・関心を高めることについても心を砕いていきたい。

協働的な学びと協調的ウェルビーイングの向上

利他性や協働性、社会貢献意識など、人とのつながり・関係性に基づくウェルビーイングは協調的ウェルビーイングと言われ、日本社会の特徴的なものだ。これを実現するのが協働的な学びである。子どもたちの学び合いによって学習が深まったり、一人の意見によって思考の多様性に気づかせてくれたりすることもある。学びへの貢献は、人間関係をも良好にする。学校行事を創り上げていく過程では、子どもたちは協働することに喜びと幸せを感じる。授業も含め、全ての教育活動を通して、全ての子どもたちを巻き込んでいく仕組みを作っていきたい。

新学期、この一年を子どもたちの幸福度をあげる年にしていきたい。子どもたちの幸福は、保護者も幸せにする。子どもたちの幸せ感度を高め、毎日小さな幸せを実感できる学校にしていこう。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●理論に基づき「ウェルビーイング」な学校をつくった小学校の実践《好評発売中！》

ウェルビーイングな学校をつくる 子どもが毎日行きたい、先生が働きたいと思える学校へ

中島晴美【著】 四六判／定価 2,200 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。

